心身科学 第14巻第1号（1−7）（2022）

職業イメージと喫煙行為に対する否定的評価に関する探索的検討

金田　宗久*1)

本研究の目的は，人々が特定の職業に対して抱くイメージを明らかにし，それらの職業に携わる人が喫煙することに対して抱く否定的な評価について検討することであった。本研究で取り上げた職業は，「看護師」，「医師」，「弁護士」，「保育士」，「フリーター」，「土木作業員」であった。それぞれの職業は，性別による違いも考慮された。大学生129名の参加者は，各対象についてのイメージを「あたたかさ」次元と「能力」次元から評定し，さらに，各対象について喫煙行為の望ましさを評定した。調査の結果，職業イメージの差異が確認された。「あたたかさ」次元は保育士や看護師において高く評価され，一方で弁護士に対しては低かった。また，「能力」次元は，医師や弁護士において高く，フリーターや土木作業員においては低い評価がなされた。喫煙行為に対する否定的評価は職業と性別による違いがみられた。保育士，看護師，医師，また，男性よりも女性の喫煙は、望ましくない行為であるとみなされていた。特定の職業や性別に関わる喫煙行為が否定的な評価を生じさせることから，喫煙に対するステレオタイプが形成されやすいと考えられる。

キーワード：職業，喫煙行為，あたたかさ，能力，否定的評価

Ⅰ．はじめに

喫煙によって引き起こされる健康被害として，肺がんや咽頭がん，虚血性心疾患，糖尿病などさまざまな種類の疾病があげられる。このような喫煙に伴う健康被害のリスクを低下させようとする対策の一つとして，2003年に「健康増進法」が施行された。その後，2020年には，望まない受動喫煙を防止するための取り組みが強化されるに至っており，社会全体の喫煙に対する意識の変化がみられるようになってきた。例えば，厚生労働省（2020）が実施した『令和元年国民健康・栄養調査』によれば，現在習慣的に喫煙している者（たばこを「毎日吸っている」又は「時々吸う日がある」と回答した者）の割合は16.7%（男性27.1%，女性7.6%）であり，過去10年間の推移を見ると喫煙者の数は減少している。また，日本医師会が行った『第6回（2020年）日本医師会員喫煙意識調査』の結果，男性医師の喫煙率は7.1%，女性医師は2.1%で，2000年の第1回調査時と比べ低下しており，「医師は立場上喫煙すべきではない」という考え方が広まっている（公益社団法人 日本医師会, 2021）。

しかしながら，30〜60歳代の男性の喫煙率は30%を超えており（厚生労働省, 2020），国民の健康の増進の総合的な推進を図るための基本的な方針『健康日本21（第二次）（厚生労働省, 2012）』で掲げられている目標値12%を上回る値となっている。また，職業によっても喫煙率に差がみられ，男女ともに「事務従事者」が最も低く，「輸送・機械運転従事者」で最も高いことが指摘されている（田中・小林, 2021）。田中・小林（2021）は，喫煙率の差を生じさせている要因として，それぞれの職業に特徴的な就労環境，個人それぞれの働き方の多様化などを指摘し，それらを考慮した喫煙習慣の対策が必要であると述べている。それにも関わらず，近年，喫煙を含む生活習慣に基づく差別や否定的な評価が問題視されている（近藤・葛西, 2020; 大原・大塚, 2011；ファイザー株式会社, 2011；Sugarman, 2003；山本・佐藤・大渕, 2014）。例えば，大原・大塚（2011）は，職場において非喫煙者は喫煙者に対し，「だらしない」や「自己管理能力がない」，「マ

＊1）愛知学院大学心身科学研究所・嘱託研究員
（連絡先）〒470-0195　愛知県日進市岩崎町阿良池12　E-mail: m-kaneda@dpc.agu.ac.jp

ナーを守らない」,「周囲への気遣いが足りない」などの否定的なイメージを抱いていることを明らかにしている。また，山本他（2014, 研究 2）は，喫煙習慣があることで，その人物の開放性，協調性，誠実性，情緒安定性を非喫煙者よりも否定的に評価することを示した。また，喫煙者の協調性と誠実性に対する否定的評価が媒介することで，採用場面における採用意図を低下させることを明らかにした。以上のような議論をふまえると，喫煙者を評価する際に喫煙行為に関わる否定的なイメージを当てはめ，ステレオタイプ的にとらえられてしまうといえる。

ところで，喫煙者に対する否定的評価を検討した先行研究においては，「喫煙者」,「非喫煙者」というカテゴリーが用いられている。このような区別は，喫煙者全般のイメージを検討するという点においては，有効な方法であると考えられる。しかし，どのような人的背景を持った人物なのかによって，喫煙者に対する否定的イメージが当てはめられるのか否かが変化する可能性がある。例えば，非喫煙者の大学生を対象に調査を行った近藤・葛西（2020）は，特定の人的背景を持つ人物が喫煙していることにどの程度不快感を抱くかを検討した。その結果，喫煙者が「妊婦」や「未成年者」であるときに特に不快感を抱きやすいことが示された。したがって，喫煙者について判断を求められた場合，その人物がどのような属性・背景の持ち主なのかという点は，否定的なイメージを当てはめて評価を下すかどうかに関与すると考えられる。また，田中・小林（2021）が，喫煙習慣の対策を考えるうえで就労環境や個人の働き方を考慮する重要性を説いている。すなわち，喫煙者が就いている職業がどのようなものであるかを考えることは，喫煙者に対する否定的イメージを修正させる可能性を高めるかもしれない。

本研究では，人々が特定の職業に対して抱くイメージを明らかにし，それらの職業に携わる人が喫煙することに対して抱く否定的な評価について検討することを目的とする。なお，田中・小林（2021）では，国民生活基礎調査の個票データを用いて分析を行っていたため，職業については日本標準職業分類（大分類）が用いられていた。この点については，詳細な職業を捉えきれておらず，細分類を用いた検討が必要であると述べている。そのため，本研究では，より細かな分類の職業を取り上げる。また，職業イメージに関わる性別ステレオタイプが，喫煙行為に対する否定的評価に影響する可能性があるため，それぞれの職業を性によって区分し，評定対象となっている人物の性別を明示することにする。

それぞれの職業イメージについては，ステレオタイプ内容モデル（stereotype content model；以下，SCM；Fisk, Cuddy, Glick, & Xu, 2002）を適用して検討する。SCM とは, ステレオタイプを「あたたかさ（warmth）」次元と「能力（competence）」次元の 2 次元でとらえている。そして，ステレオタイプの多くが，一方の次元の評価が高く，他方の次元の評価が低いという両面価値的な特徴を有していると考える。例えば，高齢者に対しては「あたたかさは高いが，能力は低い」，富裕層に対しては「能力は高いが，あたたかさは低い」という両面価値的な側面が持たれる（Fiske et al., 2002）。日本においても社会集団（e.g., 政治家，グラビアアイドル，フリーターなど）や職業に対するイメージの検討に SCM が適用可能であることが示唆されている（佐久間, 2015；佐久間, 2018）。したがって，本研究では，性別と職業が組み合わされた評定対象のイメージについて，あたたかさ次元と能力次元から測定する。

Ⅱ．方　法

1　参加者

心理学関連科目を受講している大学生129名（男性68名、女性61名）を対象に調査を実施した。平均年齢は19.36歳（SD＝1.28）であった。回答に要した時間は，およそ10分であった。

2　質問紙の構成

本調査の質問紙は，表紙を含めて計13ページから構成された。各ページの上部に評定対象が提示され，性別と職業が組み合わさった形式(例．女性の看護師，男性の看護師）で示された。本研究で取り上げた職業は，「看護師」,「医師」,「弁護士」,「保育士」,「フリーター」,「土木作業員」であった。さらに，それぞれの職業を性によって区分したため，対象は12種となった。評定対象の提示順序は,（1）看護師,（2）医師,（3）弁護士,（4）保育士,（5）フリーター,（6）土木作業員の順で提示される場合とその逆順で提示される場合を設定した。それに加えて，性による区分についても，同一職業の中で「男性→女性」の順序と「女性→男性」の順序を設定した。したがって，評定対象の提示順序が異なる質問紙を 4 種類作成した。

各評定対象に対するイメージについて，以下の質問項目への回答を求めた。

1）SD 法によるイメージ評定　各評定対象のイメージについては，佐久間（2015, 2018）に倣い，あたたかさ次元の 3 項目（「つめたい－あたたかい」，「嫌い－好き」，「親しみにくい－親しみやすい」）と能力次元の 3 項目（「知的でない－知的な」，「有能でない－有能である」，「頭がわるい－頭がよい」）を用いて 7 件法で評定を求めた。

2）喫煙行為に対する評価　各評定対象が喫煙することに対して「望ましくないこと」だと思う程度について，7 件法（1：まったくそう思わない～4：どちらともいえない～7：非常にそう思う）によって評定を求めた。

3　手続き

調査に先立ち，参加者には「職業イメージと喫煙行為に関する調査」であることを説明し，評定対象として提示される性別と職業を思い浮かべながら回答するよう教示した。参加者全体が回答を終えたことを確認したのち，デブリーフィングを行い，調査を終了した。

Ⅲ．結　果

1　職業イメージ

それぞれの評定対象におけるあたたかさおよび能力次元に関連する項目について，クロンバックの α 係数を求めた。その結果，あたたかさ次元の α 係数は .717 ～ .836，能力次元の α 係数は .753 ～ .870 と十分な信頼性が確認できた。このため，それぞれの評定対象における各次元の平均評定値をそれぞれあたたかさ得点と能力得点とした（表 1）。図 1 は各得点の散布図を示す。

佐久間（2015, 2018）を参考に，それぞれの評定対象における両得点について，理論的中央値（4 点）からの差を検討する t 検定を行った。その結果，看護師（男性, 女性），医師（女性），保育士（男性, 女性）は，あたたかさ得点と能力得点がいずれも理論的中央値よりも有意に高かった（$ts>2.38$, $ps<.05$）。土木作業員（男性，女性）のあたたかさ得点は理論的中央値より

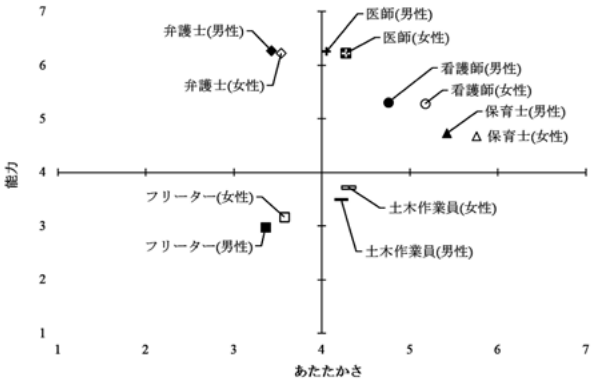

図 1　あたたかさ次元と能力次元からとらえた職業イメージ

表 1　評定対象ごとのあたたかさ得点と能力得点の平均値および標準偏差

評定対象		あたたかさ得点			能力得点		
		M	*SD*	*t* 値	*M*	*SD*	*t* 値
看護師	男性	4.75	1.04	8.21 ***	5.31	1.07	13.88 ***
	女性	5.17	1.17	11.38 ***	5.28	1.13	12.93 ***
医師	男性	4.05	0.99	0.59	6.26	0.94	27.24 ***
	女性	4.27	1.29	2.39 *	6.23	0.91	27.66 ***
弁護士	男性	3.43	1.10	5.92 ***	6.26	0.95	27.12 ***
	女性	3.54	1.06	4.98 ***	6.22	0.91	27.60 ***
保育士	男性	5.42	1.02	15.76 ***	4.74	0.95	8.80 ***
	女性	5.76	1.11	18.04 ***	4.68	1.04	7.44 ***
フリーター	男性	3.36	0.91	7.97 ***	2.98	0.95	12.21 ***
	女性	3.57	0.93	5.24 ***	3.18	0.99	9.42 ***
土木作業員	男性	4.22	1.06	2.33 *	3.50	1.03	5.49 ***
	女性	4.30	1.07	3.17 **	3.72	1.09	2.91 **

注）各得点は 1 点から 7 点の範囲で，数値が高いほど，あたたかい，能力が高いというイメージであることを示す。
***$p<.001$，**$p<.01$，*$p<.05$。

も有意に高く，能力得点は有意に低かった（$ts>2.33$, $ps<.05$）。つぎに，弁護士（男性，女性）のあたたかさ得点は理論的中央値よりも有意に低く，能力得点は有意に高かった（$ts>4.97$, $ps<.001$）。そして，フリーター（男性，女性）のあたたかさ得点と能力得点は理論的中央値よりも有意に低くかった（$ts>5.23$, $ps<.001$）。医師（男性）は，あたたかさ得点に有意差が認められず（$t=0.59$, *n.s.*），能力得点は理論的中央値よりも有意に高かった（$t=27.24$, $p<.001$）。

1）あたたかさ得点　あたたかさ得点における，職業イメージと性別の影響を検討するため 2 要因分散分析を行った。その結果，職業の主効果（$F(5, 640)=123.46$, $p<.001$, 偏$\eta^2=.491$）と性別による主効果（$F(1, 128)=26.26$, $p<.001$, 偏$\eta^2=.170$）が有意となった。職業について多重比較を行ったところ，保育士（$M=5.59$, $SE=0.09$）に対するあたたかさの評価が最も高く，次いで看護師（$M=4.96$, $SE=0.08$）が高かった。その一方で，弁護士（$M=3.48$, $SE=0.08$）とフリーター（$M=3.47$, $SE=0.07$）に対するあたたかさの評価は低かった。性別については，男性（$M=4.20$, $SE=0.04$）よりも女性（$M=4.43$, $SE=0.05$）のほうが，あたたかさの評価が高かった。

また，職業と性別の交互作用（$F(5, 640)=2.22$, $p<.10$, 偏$\eta^2=.017$）に有意な傾向が認められた。下位検定の結果，看護師，医師，保育士，フリーターにおいて性別の単純主効果（看護師：$F(1, 768)=21.09$, $p<.001$, 偏$\eta^2=.141$；医師：$F(1, 768)=5.74$, $p<.05$, 偏$\eta^2=.043$；保育士：$F(1, 768)=13.63$, $p<.001$, 偏$\eta^2=.096$；フリーター：$F(1, 768)=5.21$, $p<.05$, 偏$\eta^2=.039$）が有意となった。看護師（男性：$M=4.75$, SE$=0.11$；女性：$M=5.17$, $SE=0.14$），医師（男性：$M=4.05$, $SE=0.11$；女性：$M=4.27$, $SE=0.14$），保育士（男性：$M=5.42$, $SE=0.11$；女性：$M=5.76$, $SE=0.14$），フリーター（男性：$M=3.36$, $SE=0.11$；女性：$M=3.57$, $SE=0.14$）において，男性よりも女性に対するあたたかさの評価が高かった。

2）能力得点　能力得点についても，職業と性別の 2 要因分散分析を行った。その結果，職業の主効果（$F(5, 640)=346.88$, $p<.001$, 偏$\eta^2=.730$）が有意となり，性別による主効果（$F(1, 128)=2.29$, *n.s.*, 偏$\eta^2=.018$）は認められなかった。職業について多重比較を行ったところ，医師（$M=6.24$, $SE=0.08$）と弁護士（$M=6.24$, $SE=0.08$）に対する能力評価が最も高かった。その一方で，フリーター（$M=3.08$, $SE=0.08$）に対する評価が最も低く，次いで土木作業員（$M=3.61$, $SE=0.08$）が低かった。

また，職業と性別の交互作用（$F(5, 640)=4.21$, $p<.01$, 偏$\eta^2=.032$）が認められた。下位検定の結果，フリーター，土木作業員において性別の単純主効果（フリーター：$F(1, 768)=9.43$, $p<.01$, 偏$\eta^2=.069$；土木作業員：$F(1, 768)=11.83$, $p<.01$, 偏$\eta^2=.085$）が有意となった。フリーター（男性：$M=2.98$, $SE=0.12$；女性：$M=3.17$, $SE=0.13$）と土木作業員（男性：$M=3.50$, $SE=0.12$；女性：$M=3.72$, $SE=0.13$）の男性は，女性よりも能力評価が低かった。

2　喫煙行為に対する評価

それぞれの職業に携わる人が喫煙することに対して望ましくないと思う程度について，職業と性別の 2 要因分散分析を行った。その結果，職業の主効果（$F(5, 640)=110.43$, $p<.001$, 偏$\eta^2=.463$）と性別による主効果（$F(1, 128)=49.05$, $p<.001$, 偏$\eta^2=.277$）が有意となった。職業について多重比較を行ったところ，保育士（$M=5.57$, $SE=0.16$）に対して最も望ましくない行為であると評定された。それに次いで，看護師（$M=5.21$, $SE=0.16$），医師（$M=5.04$, $SE=0.17$）が望ましくない行為であるとみなされた。一方で，土木作業員（$M=2.88$, $SE=0.16$），フリーター（$M=3.28$, $SE=0.16$），弁護士（$M=3.96$, $SE=0.16$）では，喫煙が望ましくないとは判断されなかった。性別については，男性（$M=4.09$, $SE=0.13$）よりも女性（$M=4.55$, $SE=0.13$）の喫煙に対して，より望ましくないと判断された。

Ⅳ．考　察

本研究の目的は，人々が特定の職業に対して抱くイメージを明らかにし，それらの職業に携わる人が喫煙することに対して抱く否定的な評価について検討することであった。以下，職業イメージと喫煙行為に対する評価についてまとめる。

1　職業イメージ

SCM を適用し，あたたかさと能力の 2 次元で職業イメージについて検討した結果，看護師，女性医師，保育士に対しては，「あたたかく，能力も高い」，土木作業員に対しては「あたたかいが，能力は低い」，フリーターに対しては「つめたく，能力も低い」という

イメージが持たれていた。一方，男性医師に対しては「能力は高い」が，あたたかさに関する明確なイメージは確認できなかった。保育士やフリーターについては，佐久間（2018）とも一致する結果が得られた。また, 各次元について職業と性別の影響を検討した結果, 有意傾向ではあるが，看護師，医師，保育士，フリーターのあたたかさ次元において，男性より女性のほうがあたたかいというイメージを持たれていた。一方で, 能力次元ではフリーターや土木作業員において女性より男性のほうが，能力が低いというイメージを持たれていた。看護師や医師は患者と，保育士は児童とのやり取りが想像されやすく，献身的なイメージを持たれやすい職業であるといえる。さらに，献身的なイメージは女性ステレオタイプとも合致することで，あたたかさの評価が女性において高くなったと考えられる。なお，フリーターに関しては，全体的につめたいと評価されていることから，職業から抱かれる献身的イメージは抱かれていないと思われる。したがって，つめたい印象に留まるものの，女性ステレオタイプに基づくあたたかさ評価がなされたのかもしれない。

土木作業員に対しては, 佐久間(2018)で扱われた「大工」と類似する結果が得られた。また女性の土木作業員は，男性よりも能力が高いという評価がなされていた。これには，土木作業員における性別の割合の違いが影響した可能性が考えられる。すなわち，男性が就く職業かつ肉体労働といったイメージが先行することで，そのような環境で働く女性というイメージから比較的能力が高いという評価がなされたと考えられる。

以上のような職業イメージの違いを考慮するならば，それぞれの職業の全般的なイメージとしては性別による大きな差はみられないといえる。ただし，個々の職業に対して抱かれるイメージが性別に基づくステレオタイプで表されている特性などと紐づけられる場合には，性別によるイメージの歪み等が生じうるかもしれない。

2　喫煙行為に対する評価

特定の職業に携わる人の喫煙行為に対する否定的評価を検討した結果，職業の種類によって，その評価に差がみられた。保育士，看護師，医師においては，男女問わず, 喫煙することを望ましくないと判断された。その一方で，土木作業員，フリーター，そして弁護士の喫煙に対しては，望ましくないと判断されることはなかった。また，男性よりも女性の喫煙に対して，否定的な評価がなされていた。まず職業による差は，それぞれの職業の人が対応する相手や働く環境の違いが一つの原因として考えられる。すなわち，保育士では児童の安全や心身に気を配らなければならず，看護師や医師では患者のサポートなどの関わり合いが求められる。そして，両者ともに衛生面での配慮が要求される職場環境である。このため，自身だけでなく周囲の人にも健康被害を引き起こし兼ねない喫煙行為について, より厳しく評価されてしまうのではないだろうか。つまり，特定の領域・分野の職業に携わる人が，喫煙行為によって否定的ステレオタイプを抱かれやすくなり，差別的反応が見られるようになるかもしれない。また，性別による差については，近藤・葛西（2020）が指摘しているように妊娠の可能性が考慮されることによって，より厳しい評価がなされてしまうのかもしれない。

以上の点は，職業や性別といったステレオタイプに関わるカテゴリーがどのように用いられるかによって，喫煙行為に対する評価の基準が異なることを示唆している。今後は，喫煙行為に対して否定的評価がなされやすい職業カテゴリーと，否定的にとらえられない職業カテゴリーを選定し，それらカテゴリーに基づく評価のされ方の違いについて検討していく必要があるだろう。また，対人認知においてステレオタイプ的判断を抑制するためには，人物に関する詳細な情報を精緻化する統制的処理のはたらきが重要な役割を担っている（e.g., Devine, 1989）。したがって，喫煙者に対する否定的評価の低減，あるいは差別的な反応の抑制における意識的処理過程の有効性を検討する必要があるだろう。

引用文献

Devine, P. G. (1989). Stereotypes and prejudice: Their automatic and controlled components. *Journal of Personality and Social Psychology*, *56*, 5-18.

Fisk, S. T., Cuddy, A. J. C., Glick, P., & Xu, J. (2002). A model of (often mixed) stereotype content: Competence and warmth respectively follow from perceived status and competition. *Journal of Personality and Social Psychology*, *82*, 878-902.

近藤 有紀・葛西 敦子（2020）. 非喫煙大学生における喫煙者やたばこに対し抱く嫌悪意識 弘前大学教育学部紀要, *123*, 165-173.

公益社団法人 日本医師会（2021）. 第 6 回（2020 年）日本医師会員喫煙意識調査報告 公益社団法人 日本医師会 Retrieved from https://www.med.or.jp/dl-med/teireikaiken/20210127_1.pdf（2022 年 1 月 22 日）

厚生労働省（2012）. 健康日本 21（第二次）厚生労働省 Retrieved from https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou_

iryou/kenkou/kenkounippon21.html（2022 年 1 月 22 日）
厚生労働省（2020）. 令和元年国民健康・栄養調査報告 厚生労働省 Retrieved from https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryou/kenkou/eiyou/r1-houkoku_00002.html（2022 年 1 月 22 日）
大原 慧美・大塚 泰正（2011）. 職場における非喫煙者が持つ喫煙者イメージに関する研究 広島大学心理学研究, *10*, 245-255.
ファイザー株式会社（2011）. 男女の恋愛・結婚における喫煙意識調査　2011 年 2 月 Retrieved from https://www.pfizer.co.jp/pfizer/company/press/2011/documents/110207.pdf（2022年1月22日）
佐久間 勲（2015）. 社会集団に対するイメージ：ステレオタイプ内容モデルの検討 生活科学研究, *37*, 67-75.
佐久間 勲（2018）. ステレオタイプ内容モデルの再検討：職業イメージを対象として 湘南フォーラム：文教大学湘南総合研究所紀要, *22*, 129-136.
Sugarman, S. D. (2003). “Lifestyle” discrimination in employment. *Barkeley Journal of Employment and Labor Law*, *24*, 377-438.
田中 宏和・小林 廉毅（2021）. 職業別喫煙率とその推移：国民生活基礎調査による分析（2001-2016 年）日本公衆衛生雑誌, *68*, 433-443.
山本 雄大・佐藤 潤美・大渕 憲一（2014）. 喫煙者に対する否定的評価と差別 心理学研究, *85*, 121-129.

（令和4年1月23日受理）

Journal of the Institute for Psychological and Physical Science, Vol. 14, No. 1, 1−7, 2022

An exploratory study on the relationships between occupations and negative evaluations of smoking behavior

1) Munehisa Kaneda (Institute for Psychological and Physical Science, Aichi Gakuin University)

Abstract

The purpose of this study was to clarify the images of several occupations and to compare the negative evaluations of smoking behavior displayed by those who were engaged in these occupations. The occupations examined in this study were "nurse", "doctor", "lawyer", "childcare worker", "part-time worker", and "construction worker." Differences due to gender were also examined. One hundred and twenty-nine university students responded to a questionnaire. The results confirmed s that occupational images are differentiated. The score of the "warmth" dimension was higher in nurses and childcare workers than in lawyers, whereas the score of the "competence" dimension was higher in doctors and lawyers than in part-time and construction workers. Moreover, the negative evaluation of smoking behavior differed among occupations and between genders. Smoking behavior was evaluated as undesirable for nurses, childcare workers, and doctors, and for women, rather than men. These results suggest that stereotypes of smoking are formed for specific occupations or gender.

Key words: occupations, smoking behavior, warmth, competence, negative evaluations